

アーカス湘南ロータリークラブ最終例会のために

久保田英男(鎌倉 RC)

正月元旦、ポストに届いた年賀状の束を一枚一枚読むのが楽しみなのだが、今年はその中に妙な手書きのメッセージが入った一枚があった。

「本当に最後の卓話してくれますか？」

新年早々「最後」はないだろう、と苦笑いした。差出人を見ていなかったが、誰の書状かと確認するまでもなく、察しは付いた。原いづみ、アーカス湘南 RC 会長、と。

ここ数年、雑誌月間に寄稿していたが、昨年原稿のやり取りをした際、彼女から「最後の卓話原稿も書いてくれますよね」と言われていた。「断れない依頼だろ？」(本気で受けたくないけど、そうは言えなかった)と聞き返すと、「いいですよ、断ってくれても」と…。頭の回転の鈍い僕には、スマートに断る一文が思い浮かばず、言葉に詰まってしまうそのままになっていた。それが、この年賀状で念を押されることになり、やはりここでも辞退する機会を失い、今、筆を走らせている。

2015年横須賀ロータリークラブが、当地区で初のEクラブとして、「かながわ2780ロータリーEクラブ」が誕生した。今でもそうかもしれないが、ロータリーの例会は対面・インパースンで行うのが『当たり前』とされ、「オンラインで何ができるの」という冷ややかな声が聞こえていた。しかし、そこに集まった若いロータリアンはそんな雑音など聞こえないのかのように、次々と新しいことを始めて多くのロータリアンを驚かせてきた。が、一方で新しいテクノロジーやメディアを活用した活動様式が耳目を集めるとアンチも一定数出てきたことは否定できないだろう。そうした心理的な逆風の中、前例のないまさに暗中模索の活動、期待も大きかった上、組織も未成熟だったこともあり、負荷は僕達古いスタイルのロータリアンには分からないほど、大きく彼らに押し掛かってしまったのだろう。しばらくすると次第に会員数も減ってしまい、勢いも元気も低下し、存在感が薄れてしまう。これらの苦勞があったが、ここで解散することは選択せず、2019年5月クラブ名を現在の「アーカス湘南ロータリークラブ」と改称し、おそらく心機一転のリスタートを図ったのだろう。

さてさて、改称した2019年とは、どんな年だったのだろうか。日本では「コロナ」と呼ばれ、地球上の生活を一気にパンデミックとなった疫病がアジアで始まった年だ。海外では「コロナ」ではなく「COVID-19」と呼ばれる。「COVID-19」の「19」は2019年のことだ。感染力が強く、最悪死に至るこの疫病から人々を守るため、世界中で人と物の往来が制限され、それが深刻になると日常の生活も制限されていく。

僕がガバナー職にあったのは、2020年7月から2021年6月だった。事前の準備期間も含め任期中の全てが、この災禍中にあり、全ての活動がそれまでと一変してしまった。次年

Hideo Kubota (Kamakura RC)

度の準備として行われるセミナーは、国の感染予防施策によって対面での開催はできなくなってしまった。しかし、この状況がいつ解除されるかも分からないので、セミナーを不開催とするわけにはいかない。そこで、とった手段が「オンラインセミナー」という手法だった。研修用のポータルサイトを作成し必要な資料を閲覧し、受講した後、レポートを提出してもらう方法でセミナーに代え、オンラインミーティングのアプリケーションを活用して対面と同様のディスカッションやオンラインで可能なワークショップなどを実施した。その他、フェイスブックやYouTubeなどで動画を利用しメッセージを届けたりもした。

この時を境に、当地区の各ロータリークラブでのオンラインの利用率は上がった。その利便性と活用方法はコロナ禍後の生活においても、必要とされるツールとして認知されている。ロータリークラブにおいても、ネットは通信手段や一方向の情報配信だけでなく、参加する機会として認知・活用されている。

いかにも僕が初めて導入した始祖みたいに語っているが、そうではない。それまでの価値観の中で不要又は使い方のよく分からないモノとされていたものが、コロナ禍の中で必要とされ、それが非常時にだけでなく平常時においてもその真価が正当に評価されただけで、新しく作った道具でも手法でもない、ましてや僕達が創めた訳ではないのだ。むしろそれを言うなら、アーカス湘南ロータリークラブはそれ以前から、その価値を認識し、活用し、新しい扉を開いていたのだ。こうした経験から改めて知ること、このクラブがこの10年間果たしてきた役割の一端に触れることもできた。少々時間がかかりすぎているが。

DEI、「Diversity (多様性)」「Equity (公平性)」「Inclusion (包括性)」という面で評価しても、誰でもどこからでもいつでもロータリークラブに参加できる環境を構築することで、DEIを具現化しようとしていたとも言えるのではないかと思っている。多少、褒めすぎではあるが。

今回のクラブの解散をクラブ会員や他クラブのロータリアンがどの様に感じているのか、僕は知る術もなく、また、正直他の人の感想など興味もない。ただ、僕はこう思っている。

「研究者諸君、難解な言葉を並べて悦になるなかれ。その理論、発明、発見は誰もが享受できて、はじめて科学となるのだ」僕の尊敬する社会学者が我々学生に向けて語った「議論や知識をひけらかしてばかりいないで、実践し形に残せ」というメッセージだ。ロータリアンも他の人に通じない言葉で語り合って満足していないだろうか。今のロータリークラブのあり方を客観的にみた時、ロータリークラブの中で自己完結してしまっていて、社会環境の変化の中に適応できないのではないかという危機感とともに不安を感じてしまっている。そういう点で、このクラブは、間違えなく実践し、爪痕を残してきた。

伝統的なロータリークラブ像とは違う多種多様な姿もあることと示し、ロータリークラブが未来に向けて排他的にならないよう警鐘を鳴らし、役目を終えるのだろう。終われば誰もが忘れる、とはいかないだろう。ただ枯れるのではそのこぼした種は誰かが拾い、大事にその花や実を必要とされるまで大切に保管しているはずだ。

アーカス湘南ロータリークラブとして参加する最後の会長幹事会で、ガバナー補佐をはじめ他のクラブ会長幹事から花束が、原会長と大塚幹事に贈られたそうだが、本当に嬉しいことであり、前述の種はきっこうした人達の手の中に残っているのだと思う。

このクラブがEクラブとして誕生してから、さらに技術は進み、AIが人知を超える日が近いと感じさせる時代になった。試しに、AIに書かせてみたので、披露してみよう。

【AIが生成した文】

アーカス湘南ロータリークラブは、2015年3月1日、横須賀ロータリークラブをスポンサーとして「かながわ2780ロータリーEクラブ」として誕生いたしました。

オンラインを活かした新しい奉仕のかたちを模索しながら、地域社会と世界をつなぐ活動を積み重ねてこられたことは、多くの方々に希望と可能性を示すものでありました。

そして2019年5月には「アーカス湘南ロータリークラブ」へと改称し、より地域に根ざしたクラブとして新たな歩みを進められました。

その名の通り“虹の架け橋”のように、人と人、地域と世界、世代と未来を結ぶ活動を展開されてきたことに、深い敬意を表します。

本日、2026年2月28日をもちましてクラブが終結を迎えられるにあたり、これまでの長きにわたるご奉仕、友情、そして挑戦の積み重ねに、心より感謝申し上げます。

クラブとしての活動は幕を閉じますが、皆さまが築かれた精神と絆は、これからも確かに生き続け、地域社会の中で輝き続けることでしょう。

これまでのご尽力に深く感謝申し上げるとともに、今後も皆さまお一人おひとりのご健勝と更なるご活躍をお祈り申し上げます。

(Micro Soft “Copilot”)

「すごい」と思うか、「こんなものか」と思うかは自由だが、きっと5年後、10年後にはもっと「すごい」何かが生まれているのだろう。きっとその度にアーカス湘南ロータリークラブだったらどんなことをしていたのかなあ、と想像するのだろうな。でも、10年後、僕はこの世にはないだろうな。だったら、その時まで、頑張っ続けて欲しかったな。そうすれば、こんな寂しい原稿書かなくてすんだのに。と、最後まで愚痴をこぼしながらも、断らず寄稿するのは、アーカス湘南ロータリークラブが頑張ったからだよ。「さよなら」じゃないからね。ひとまずはお疲れ様でした、ということで。(了)